

斯波六郎『陶淵明詩訳注』の訓読小考

長谷川滋成

斯波六郎『陶淵明詩訳注』（初版昭和26年1月・東門書房、再版昭和56年1月・北九州書店）の訓読は、他書の訓読とは違った趣があり、一考に値すると思われる。本稿では紙数の都合上、助字の訓読を中心にして、「乃」「便」「且」「自」「以」「已」「復」「當」を取り上げ、一通り考察することとする。引用書は再版本を用い、旧字体は新字体に変え、原文と書き下し文を上下入れ替え、振り仮名は必要な箇所にとどめ、引用した詩句の頁数を括弧内に示すこととする。

□ 「乃」の訓読

『助字弁略』には「乃」の意味として、「引辞也、不絶之義也」「繼事之辭、猶云爰也」「發語辭、猶云粵也」「語助辭、不為義也」「猶云其也」「始也」「緩辭、猶云然後」「如此也」などを挙げているが、これらの意味はおおむね句相互の関係を意識するものであることに注目しておきたい。

(1) 「乃」一字の訓読

① 「ニレ」と訓読する例

洋洋平津 洋洋たる平津

② 「あるひハ」と訓読する例

乃陳好言 乃是好言を陳べ

③ 「かヘツテ」と訓読する例

山沢久見招 山沢に久しく招かれつも

④ 「ことのほ力」と訓読する例
胡事乃躊躇 胡事ぞ乃つて躊躇せし (210)

⑤ 「いぐわいニモ」と訓読する例
四体誠乃疲 四体は誠に乃か疲るるも
庶無異患干 庶くは異患の干すことなけん (263)

① 「ニレ」と訓読する例
乃漱乃濯 乃れ漱ぎ乃れ濯ふ (130)

② 「あるひハ」と訓読する例

乃著新詩 乃是新詩を著す (141)

③ 「かヘツテ」と訓読する例
山沢久見招 山沢に久しく招かれつも

④ 「ことのほ力」と訓読する例
胡事乃躊躇 胡事ぞ乃つて躊躇せし (210)

⑤ 「いぐわいニモ」と訓読する例
四体誠乃疲 四体は誠に乃か疲るるも
庶無異患干 庶くは異患の干すことなけん (263)

乃不知有漢 無論魏晉

乃にも漢の有りしことをすら知らず (まして)

や) 魏晉は論もなし (356)

⑥ 「くしクモ」と訓読する例

故老贈余酒 故老余れに酒をば贈り

乃言飲得仙 乃くも言へらく飲まば仙を得んと (2

04)

⑦ 「はじメテ」と訓読する例

連林人不覺 連林とき人覺はず

独樹衆乃奇 独樹にして衆乃めて奇とす (274)

③④⑤⑥⑦の 「かへツテ」「ことのほ力」「いぐわいニ

モ」「くしクモ」「はじメテ」はみな、思いのほか・予想

外の心情を表す意味で、⑦「はじメテ」は『助字弁略』

の「始也」に相当するとして、他は相当する意味が見当

たらないが、『説文解字』の「乃曳詞之難也」(言葉が続

き難い)から、その意味が出るのであろう。上の文の内

容を曲げて受ける、それが「乃」の本来の意味のよう

である。上の文の内容を曲げて受ける「乃」を、著者は各

詩の詩意を考慮して、絶妙に「かへツテ」「ことのほ力」

「いぐわいニモ」「くしクモ」「はじメテ」と訓読し分け

ている。

(2) 「乃」を含む二字の訓読

① 「復乃」を「いまさらニハ」と訓読する例

不復乃為嗟歎 いまとならには為に嗟歎せず (184)

「復乃」を「いまさらニハ」と訓読するのは、「復」の意味の「又也」「更也」「再也」「重也」に重点を置くもので、「乃」の意味は「語助辞」と見なしているのであろう。

② 「詎乃」を「なぞ」と訓読する例

即理愧通識 即理通識に愧づるも

所保詎乃浅 保つ所は詎乃浅からめや (246)

「詎乃」を「なぞ」と訓読するのは、「乃」を「語助辞」と見なすのであろうが、『助字弁略』には「何乃猶云何但」とあり、「乃」を「但」と見ていくようである。

□ 「便」の訓読

『助字弁略』には「便」の意味として、「即也」「猶云遂也、竟也」「仮令之辞、猶云縱也」などを挙げている。

(1) 「便」一字の訓読

① 「すなはチ」と訓読する例

一往便當已 一往して便ち當に已むべし

何為復狐疑 何為れぞ復も狐疑する (279)

② 「ただちニ」と訓読する例

具答之 便要還家

具に之に答へしに 便に要へて家に還り (356)

③ 「はやクモ」と訓読する例

人事好乖 人事は乖き好く

便當語離 便くも離ることを語らんとす (198)

①の「すなはチ」、②の「ただちニ」、③の「はやクモ」

は、「即也」(すぐに)に依るものである。

(4) 「そこニ」と訓読する例

林尽水源 便得一山

林尽くるところ水の源にして 便に一山あるを得り
ぬ (355)

「そこニ」と訓読するのは、「即也」から導かれたもので、「(すぐ)そこニ」と見なしたのであろうか。

(5) 「きままニ」と訓読する例

応尽便須尽 尽くべくんば 便に尽きしむべし
無復獨多慮 復た独り多慮 ふなかれ (169)

「きままニ」と訓読するのも、「即也」から導かれたもので、「(すぐにでも勝手)きままニ」と見なしたのであろうか。

(6) 「よつテ」と訓読する例

便捨船従口入 初極狭

便て船を捨てて口従り入りしに 初めは極めて狭く

(355)

「よつテ」と訓読するのは、「猶云遂也、竟也」に依るのであろう。

□ 「且」の訓読

(1) 「且」一字の訓読

① 「かつ」と訓読する例

山潤清且浅 山潤清く且つ浅く

可以濯吾足 以て吾が足を濯ぐ可し (180)

「かつ」と訓読するのは、『助字弁略』の「猶云又也」に相当する。

(2) 「しばらク」と訓読する例

何以称我情 何を以てか我が情に称へん
濁酒且自陶 濁酒且く自り陶しむ (261)

「しばらク」(とりあえず)と訓読するのは、『助字弁略』の「聊且、姑且之辞」に相当する。

(3) 「ままヨ」と訓読する例

天運苟如此 天運苟に此くの如し
且進杯中物 且よ進めん杯中の物を (299)

(4) 「とまレ」と訓読する例

且極今朝樂 且れ今朝の楽しみを極めん
明日非所求 明日は求ふ所に非ず (186)

「ままヨ」(どうにでもなれ)、「とまレ」(なんにせよ)と訓読するのは、「聊且、姑且之辞」から導かれたものであろう。

(2) 「且」を含む二字の訓読

① 「聊且」を「しばシ」と訓読する例

聊且憑化遷 聊且し化遷に憑すとも

終反班生廬 終には反らん班生の廬に (236)

「聊且」を「しばシ」と訓読するのは、「聊且、姑且之辞」に相当する。

② 「且為」を「とまレ」と訓読する例

理也可奈何 理なり奈何す可き

且為陶一觴 且為れ一觴に陶はん (326)

「且為」を「とまレ」と訓読するのは、「為」を「語」
と見なすのである。

『助字弁略』には「みづかラ」と訓読する意味は見当
たらないが、『正韻』に「自躬親也」とある。

□ 「自」の訓読

『助字弁略』には「自」の意味として、「従也」「由也」「用也」「語助、不為義也」を挙げている。

(1)

「自」一字の訓読

(1) 「より」と訓読する例

有風自南 風あり南よりし

翼彼新苗 彼の新苗を翼さしむ (130)

(2) 「はじマル」と訓読する例

悠悠我祖 悠悠たる我が祖 (はじま)

爰自陶唐 爰に陶唐に自る (152)

(1) の「よりし」は「従也」「由也」に依る訓読だが、

(2) も「よりす」と訓読できるが、詩意を考慮して「はじ
マル」と訓読したのである。

(3) 「おのづかラ」と訓読する例

問君何能爾 君に問ふ何して能く爾るかと

心遠地自偏 心遠ざかり地 自ら偏ればなり (2)

7-2)

『助字弁略』に「自然者、無所勉強之辭也」とあるの
が、「おのづかラ」の意味に相当するのである。

(4) 「みづかラ」と訓読する例

憶我少壯時 憶ふ我れ少壯かりし時

無樂自欣豫 楽しみ無きに自ら欣豫び (321)

(5) 「ひとり」と訓読する例

何以称我情 何を以てか我が情に称へん

濁酒且自陶 濁酒且く自り陶しむ (261)

(6) 「すすミテ」と訓読する例

村中聞有此人 咸來問迅 自云

村中此の人あるを聞き 咸來りて問迅ひぬ 自みて
云ふ (356)

(5) 「ひとり」と訓読し、(6) 「すすミテ」と訓読するの
は、「みづかラ」から導き出したもので、(5)は「(みづか
ラ)ひとり」と強調した訓読であり、(6)は「(みづかラ)
すすミテ」と強調した訓読なのである。

(2) 「自」を含む二字の訓読

(1) 「自従」を「より」と訓読する例

自従分別來 分別れてよりこのかた

門庭日荒蕪 門庭日に荒蕪たれど (306)

「自従」を「より」と訓読するのは、「従也」に依り
同意の二字を重ねたものである。

(2) 「各自」を「おのがじシ」と訓読する例

向來相送人 向來に相送れる人

各自還其家 各自し其の家に還る (353)

「各自」を「おのがじシ」と訓読するのは、「みづか
ラ」を複数の意味にして訓読したのである。

(3) 「自逸」を「きままニ」と訓読する例

宴安自逸　宴安りて自逸にしなば

歳暮奚冀　歳暮におよんでは奚をか冀られん（149）

「自逸」を「きままニ」と訓読するのは、「みづかラ

ほしいままニス」を縮めて訓読したのである。

④「自得」を「じとく」と訓読する例

被褐欣自得　褐を被て自得を欣しみ

屢空常晏如　屢ば空しきも常に晏如たり（235）

「自得」には振り仮名がふつてないが、「じとく」と

訓読しているのだろう。「みづかララ」と訓読みしなかつたのは、「自得」は熟した二字と見なしたからであろう。

⑤「徒自」を「あだニひとり」と訓読する例

塵爵恥虛罍　塵爵に虛罍を恥ぢらひ

寒華徒自榮　寒華は徒に自り榮けり（172）

「徒自」を「あだニひとり」と訓読しているが、著者は語訛に「徒自は菊酒を飲んで花の相手になつてくれる人の無いのをいふ」と記しているのによると、「自」を「語助」と見なし、二字で「あだニ」と訓読することもできようか。

□ 「以」の訓読

(1) 「以」一字の訓読

千載非所知　千載は知る所に非ず

聊以永今朝　聊か以て今朝を永うせん（261）

「以」を「もつテ」と訓読するのは、『助字弁略』の「用也」に相当するものである。

②「よつテ」と訓読する例

不有同好　同じ好み（の人）有らずんば

云胡以親　云胡にしてか以て親しまん（140）

③「よし」と訓読する例

屢闕清酤至　屢ば清酤の至るを闕き

無以樂當年　當年を樂しむに以なし（228）

②の「以」を「よつテ」と訓読し、③を「よし」と訓読するのは、「猶因也」に相当する。

④「おいテ」と訓読する例

爰以履霜節　爰に霜を履むの節において

登高餞將帰　高きに登りて帰らんとするに餞す（218）

「以」を「おいテ」と訓読するのは、「于以猶言于此」と相当するのである。

⑤「ためニ」と訓読する例

孟公不在茲　孟公茲に在らざれば

終以翳吾情　終く以に吾が情を翳らす（283）

「以」を「ためニ」と訓読するのは、「故也」「亦因之転也」に相当するのであるか。

(2) 「以」を含む二字の訓読

①「是以」を「さればこそ」と訓読する例

是以植杖翁　是以杖を植てし翁

悠然不復反　悠然として復た反らざりき（246）

「是以」は普通は「こゝもつテ」と訓読するが、詩意を考慮して「さればこそ」（思つたとおり）と訓読したのであろう。

②「所以」を「げにモヤ」と訓読する例

世路廓悠悠 世路廓くして悠悠たり

楊朱所以止 所以もや楊朱の止まりしは (286)

「所以」は普通は「ゆゑん」と訓読し、「楊朱の止まる所以なり」と訓読するこの句を、詩意を考慮して3字目4字目の「所以」から訓読しはじめ、「げにモヤ」(なるほどなあ)と読んだのであろう。

③「甘以」を「あまンジテ」と訓読する例

草廬寄窮巷 草廬窮巷に寄せ

甘以辭華軒 甘んじて華軒に辭しぬ (257)

「甘以」を「甘んじて」と訓読したのは、「以」を「猶而也」と見なしたのであろう。

④「固以」を「まことニモ」と訓読する例

人事固以拙 人事固以にも拙し

聊得長相從 聊はくは長へに相従ふを得ん (335)

「固以」を「まことニモ」と訓読したのは、「以」を「語助、不為義也」と見なしたのであろう。

□ 「已」の訓読

『助字弁略』には「已」の意味として、「語終辞」「猶耳」「猶云既也」「止也」「甚也」「嘗也」「猶又也」「与以通」などを挙げるが、これらの意味はおおむね時間を意

識した意味であることに注目したい。

(1)「已」一字の訓読

①「すでニ」と訓読する例

晨耀其華 晨に其の華を耀かせども

夕已喪之 夕には已に之を喪ふ (134)

②「いつしかニ」と訓読する例

余閒居寡歡 兼比夜已長

余れ閒居して歎び寡く 兼ふるに比る夜已に長

くなりぬ (267)

①②は「猶云既也」に依る訓読だが、②は夜が長くなつたことを単に「すでニ」と訓読せず、歎びの寡い情を汲んで、「(いつの間にか)すでに」と訝りの情を入れて訓読している。

③訓読しない例

傾耳無希声 耳を傾げて希けき声も無きに
在目皓已潔 目に在るもの皓くして潔らなり (250)

③は「已」を「与以通」と見なし、「皓くして已て潔らなり」と訓読するところを「已て」を省いて訓読したのであろう。

(2)「已」を含む二字の訓読

①「既已」を「すでニシモ」と訓読する例

既已不遇茲 既已にしも茲に遇はず

且遂灌我園 且よ遂して我が園に灌らん (259)

①は「既」「已」とともに「すでニ」と訓読するのに從

い、合わせて「すでニシモ」と訓読したのである。

②「一已」を「ひとタビすでニ」「ひとヘニモ」と訓

読する例

幽室一已閉

幽室^{ひと}一^{たび}已^{すで}に閉させば

千年不復朝

千年に復びは朝あらず（353）

素顏斂光潤

素顏^{ひと}光潤を斂め

白髮一已繁

白髮^{ひと}にも繁し（227）

③「早已」を「はやクモすでニ」「はやクモ」と訓読する例

歳月相催逼

歳月^相に催し逼つて

鬢邊早已白

鬢邊^{はや}くも已^{すで}に白し（282）

弱質与運積

弱質^{はや}くも運とともに積へ

玄鬢早已白

玄鬢^{はや}くも白し（324）

②③は二字のうちの「已」を、「すでニ」と訓読する例と訓読しない例である。「すでニ」と訓読しない「已」

の字は、著者は語釈で「已是助辞」と記している。③の例はともに毛髪を言うもので、「已」の字を訓読するしないの区別は必要ない、と思われる。

④「亦已」を「またすでニ」と訓読する例

親戚或余悲

親戚或は余りの悲みあり

他人亦已歌

他人また已^{すで}に歌ふ（353）

既耕亦已種

既に耕しまだ已^{すで}に種ゑ

時還讀我書

時に還つて我が書を読む（348）

④は二つの例ともに「またすでニ」と訓読するのだが、

「既耕亦已種」は右の訓読とは別に、後出の「本より豊

かならざる既に、復ふるに老と病と之に繼げり」に倣つて、「耕せし既に亦已ふるに種ゑ」と訓読することも可能であろう。

⑤「久已」を「つとニ」「とくニ」と訓読する例

形骸久已化

形骸^{つと}に化れるも

心在復何言

心在り復も何をか言はんや（205）

斯人久已死

斯の人久已に死せしも

郷里習其風

郷里其の風を習へりと（305）

⑥「嚮已」を「かねテヨリ」と訓読する例

箴規嚮已從

箴規^{かね}は嚮已^{より}てより從はれ

計議初無虧

計議は初めより虧くる無し（346）

⑦「甫已」を「はじメテ」と訓読する例

九域甫已一

九域甫已^{はじ}めて一となり

逝將理舟輿

逝將に舟輿を理めんとせしに（224）

⑤「已」を「すでニ」と訓読しないで、別の訓読を

する例だが、⑥の「嚮已」・⑦の「甫已」と合わせて、

この三つの「已」は「久」「嚮」「甫」の意味からすると、「猶云既也」「嘗也」の意味を持つのであろうか。

⑧「好已」を「はなはダシク」と訓読する例

我不踐斯境

我れ斯の境を踐まざるに

歳月好已積

歳月好已^{はなは}だしく積めり（253）

⑨「稍已」を「ややニ」と訓読する例

荏苒歳月頽

荏苒に歳月の頽れて

此心稍已去

此の心は稍已^{やや}に去り（321）

⑩「忽已」を「たちまチニシテ」と訓読する例

時還讀我書

時に還つて我が書を読む

奈何五十年 奈何ぞや五十の年

忽已親此事 忽已ちにして此の事を親せんとは (3)

(8) 「已」は「好」と同意の「甚也」だが、⑨⑩の「已」はどう説明するのだろうか。

(11) 「已復」を「いつしかニ」と訓読する例

歎來苦夕短 歎來しんで夕の短きに苦み

已復至天旭 已復に天旭くるに至りぬ (180)

「已復」を「いつしかニ」と訓読するのは、前出の「已」一字を「いつしかニ」と訓読したのに従い、「復」を「語助」と見なしたのであろう。

□ 「復」の訓読

『助字弁略』には「復」の意味として、「又也」「更也」「再也」「重也」「反也」「還也」「仍也」「亦」「語助」を挙げている。

(1) 普通の詩句における「復」の訓読

(1) 「まタ」と訓読する例

嘯傲東軒下 嘯傲す東軒の下

聊復得此生 聊か復た此の生を得たり (274)

(2) 「さらニ」と訓読する例

復前行 欲窮其林

復に前み行ひて 其の林を窮めんと欲へり (355)

(3) 「ふたたび」と訓読する例

久在樊籠裏 久しく樊籠の裏に在りしが

復得返自然 復び自然に返るを得たり (176)

ふたた

①は『助字弁略』の「又也」、②は「更也」、③は「再也」に合致する。「又也」「更也」「再也」は語義的には、同じ事柄が時間を経て繰り返される意を有しており、時間意識した語だと言えよう。

(4) 「なホ」と訓読する例

游目漢廷中 目を漢廷の中に游せば

二疏復此舉 二疏復ほ此の舉あり (342)

(5) 「そモ」と訓読する例

謂人最靈智 人はしも最靈智と謂へど

独復不如茲 独り復も茲の如からず (165)

④は「還也」「仍也」(なお)に通じ、⑤は「語助」であろう。

(6) 「くはフルニ」と訓読する例

本既不豊 復老病繼之

本より豊かならざる既に 復ふるに老と病と之に
継げり (198)

(7) 「つねトス」と訓読する例

顧影獨尽 忽焉復醉

影を顧みつつ独り尽し 忽焉に醉ふを復とす (267)

⑥を「復ふるに」と訓読するのは「重也」に依るのだ

ろうが、ここは「既く復く」の語法を意識してのこと。

普通ならば「本既に豊かならず、復た老病之に継げり」と訓読するところを、「豊かならざる既に」と訓読して、

これに呼応して「復ふるに」と訓読したのである。⑦「復」を「復とす」と訓読するのは「反也」(反復する)に依るのであろうが、前句の「独り尽くし」を受けて、「酔ふを復とす」と訓読したのであろう。

かく見ると、①～⑤はともかく、⑥⑦は「復」の意味

から逸脱してはいないが、詩意を考慮した著者独自の訓読が示されている、と言うことができよう。

(2) 上に否定語を伴う「復」の訓読

① 「まタ」と訓読する例

我無騰化術 我れに騰化の術しなければ

必爾不復疑 必爾として復た疑はず (166)

老少同一死 老と少と同しく一死

賢愚無復數 賢と愚と復た数ぶなし (168)

② 「さらニ」「さらニハ」と訓読する例

求我盛年歎 我が盛年の歎を求むるに

一毫無復意 一毫も復に意なし (323)

從來將千載 従来將に千載ならんとするも

未復見斯儔 未だ復には斯の儔を見ず (333)

③ 「ふたたビハ」と訓読する例

幽室一已閉 幽室一たび已に閉ざせば

千年不復朝 千年に復びは朝あらず (353)

副詞が上に否定語を伴う場合は部分否定と言われ、通常は全部否定の訓読と変えているが、「復」は変えず、両否定とも「まタ」と訓読している。②「さらニハ」、③「ふたたビハ」、及び以下に示す⑤「いまさらニハ」、

⑦「いささかモ」は、部分否定を意識した訓読かと思われる。

④ 「もはヤ」「もはヤニ」と訓読する例

復^{もは}や焉を出でず (356)

白髮被^{もは}両鬢 白髮は^{もは}両鬢に被り

肌膚不復實 肌膚^{もは}復に実たず (299)

薪者向我言 薪する者我に向ひて言ふ

死沒無復余 死没りて復に余れるものなしと (179)

⑤ 「いまさらニハ」と訓読する例

不復乃為嗟歎

復^{いまさら}には為に嗟歎せず (184)

⑥ 「すでニ」と訓読する例

得失不復知 得失復に知らず

是非安能覺 是非安んぞ能く覺らんや (350)

⑦ 「いささかモ」と訓読する例

我実幽居士 我^{ささか}は実れ幽居の士

無復東西縁 復^{ささか}も東西するの縁なし (199)

④ 「もはヤ」「もはヤニ」は時間を意識した「又也」「更也」「再也」「重也」から派生した訓読だろうが、その意は⑤の「いまさらニハ」、⑥の「すでニ」と通ずるものである。⑦の「いささかモ」は「更也」に依るのだろうが、前句の「幽居の士」である「我」は、「東西するの縁」を持たぬ存在であることを、「復も」と訓読するこ

とで、強調しようとしたのであろう。

「復」を「もはヤ」「もはヤニ」と訓読してしまえば、「いまさらニハ」「すでニ」「いささかモ」は、その線上にある訓読と/or/ことができよう。④の訓読を「復た焉を出でず」とし、⑤を「復た乃ち為に嗟歎せす」とし、⑥を「得失復た知らず」とし、⑦を「復た東西するの縁なし」とした場合と比べたとき、著者の訓読の妙に牽かれるざるを得ない。

(3) 疑問詞を伴う「復」の訓読

① 「はタ」と訓読する例

本不植高原 もと高原に植ゑざりしかば

今日復何悔 今日復た何をか悔いん (314)

俯仰終宇宙 俯仰のひまに宇宙を終る

不樂復何如 楽しまずして復た何如せん (349)

② 「そモ」と訓読する例

三皇大聖人 三皇は大聖人なりしも

今復在何處 今は復も何處にかかる (168)

朝與仁義生 朝に仁義とともに生きなば

夕死復何求 夕に死すとも復も何をか求めん (33)

(3)

疑問詞を伴う「復」の訓読は、「はタ」と「そモ」の

二つだけで、いざれにせよそれは語勢を助ける「語助」で、殆ど意味を持つていらない。著者は疑問詞を伴う「復」は軽い使い方で、殆ど意味は持たぬと判断し、「まタ」「さらニ」「ふたたび」と訓読しなかつたのであろう。

(4) 「復」と他の助字を合わせた訓読

① 「当復」を「はた」と訓読する例

未知從今去 未だ知らず今よりのち

當復如此不 当復此くの如くなるや不やを (186)

② 「亦復」を「さあれ」と訓読する例

榮華誠足貴 榮華誠に貴ぶに足るも

亦復可憐傷 亦復憐み傷む可し (308)

③ 「若復」を「いやしきモ」と訓読する例

若復不快飲 若復くも快くまで飲まざりせば

空負頭上巾 空しく負かん頭上の巾に (287)

① 「当復」の二字を意味を持たない「はた」と訓読するには、『助字弁略』の「当復竝語助」に符合する。② 「亦復」を「それもそなだが」の意の「さあれ」と訓読するのは、『亦』の意に沿つて「復」を「語助」と見たのであろう。③ 「若復」を「いやしきモ」と訓読するの

は、「もシ」と訓読する「若」に従い、「復」を語助と見たのであろう。言い換えれば、著者は「当復」「亦復」「若復」は二語ではなく、「一語」と見なしたということであろう。これによれば、「當に復此の如くなるべきや不や」 (117)、「亦復憐傷す可し」 (277)、「若し復快飲せんば」 (259) と訓読する鈴木虎雄『陶淵明詩解』(東洋文庫) には与しないことになろう。

(5) 「復」と副詞を合わせた訓読

① 「已復」を「もはヤニ」「いつしかニ」と訓読する

例

日月推遷 已復九夏

日月推し遷り 已復に九夏となりぬ (134)

歎來苦夕短 歎來しんで夕の短きに苦み

已復至天旭 已復に天旭くるに至りぬ (180)

② 「真復」を「げにモ」と訓読する例

此事真復樂 此の事こそ真復も樂しけれ

聊用忘華簪 聊か用つて華簪を忘る (215)

③ 「浸復」を「やうやくニ」と訓読する例

往迹浸復涙 往ける迹浸復に涙もれ

來逕遂蕪廢 来れる逕遂に蕪れ廢れたり (358)

著者は①「已復九夏」と「已復至天旭」の語訛に「復」には殆ど意味がない」と記している。②③の「復」も①と同じく殆ど意味がない「語助」で、「真復」「浸復」「已復」は二語ではなく、一語と見なしたのである。

④ 「時復」を「ときニハ」「をりをりニ」と訓読する

例

時復墟曲中

時復には墟曲の中

披草共來往 草を披いて共に來往するも (177)

堤壺挂寒柯

堤壺寒柯に掛け

遠望時復為 遠望時復に為す (274)

⑤ 「益復」を「ますますニ」と訓読する例

信宿酬清話

信宿して清話を酬し

益復知為親 益復に親なるを知る (221)

④ の「時復」を「ときニハ」と訓読するのは、「復」を「語助」と見なしているようだが、「をりをりニ」及

び⑤「ますますニ」と訓読するのは、「復」の意を「又也」「更也」「再也」「重也」と見なしているのかも知れない。

(6) 「復」と動詞を合わせた訓読

① 「行復」を「ゆくゆクシモ」と訓読する例

於今甚可愛 今こそ甚も愛づ可けれ

當奈行復衰 当た奈んせん行復くしも衰ふるを (231)

② 「復生」を「よみがヘリシモ」と訓読する例

果菜始復生 果菜始めて復生りしも

驚鳥尚未還 驚鳥は尚ほ未だ還らず (258)

① 「行復」を「ゆくゆクシモ」、② 「復生」を「よみがヘリシモ」と訓読するのは、「復」を「又也」「更也」「再也」「重也」と意識しているようであるが、②の「復」は動詞「復る」意と解しているようでもある。

□ 「当」の訓読

(1) 「当」一字の訓読

① 「まさニベシ」と訓読する例

得歎當作樂 歆を得ては當に楽しみをなすべし

斗酒聚比隣 斗酒もて比隣を聚めん (317)

② 「ベシ」と訓読する例

及時當勉勵 時の及にぞ勉勵すべき

① 「まさニベシ」と訓読するのは、『助字弁略』の

「応也」「合也」に相当し、②「ベシ」は再讀文字の初めの読みの「まさニ」を省いた訓讀で、意味からすれば「まさニベシ」よりも柔らかい印象を与えていた。

③「まさニス」と訓讀する例

辞家夙嚴駕 家を辞せんとして夙に駕を嚴ふ
当往至無終 當に往いて無終に至らんとす(305)

④「す」と訓讀する例

咄咄俗中愚 咄咄俗中の愚

且当從黃綺 且よ黃綺に從はんとす(273)

且當從先邁 君當し先づ邁かんとすと聞くも

負病不獲俱 病を負うて俱にするをえず(224)

④「す」よりも柔らかい印象を与えていた。

⑤「いまシ」と訓讀する例

聞君當先邁 君當し先づ邁かんとすと聞くも

病を負うて俱にするをえず (224)

⑥「をりニモ」と訓讀する例

怒如亞九飯 怒如は九飯に亞ぎ

当暑厭寒衣 暑さの当にも寒衣に厭く(301)

⑤の「いまシ」と⑥の「をりニモ」と訓讀するのは、『助字弁略』の「正適之辭」に相当するのであろう。

(2) 疑問詞を伴う「当」の訓讀

①「はタ」と訓讀する例

前塗當幾何 前塗は當た幾何

未知止泊處 未だ知らず止泊の処を(322)

不賴固窮節 固窮の節に頼らずんば

百世当誰伝 百世当た誰をか伝へん (269)

「当」を「はタ」と訓讀するのは、『助字弁略』の「語助、不為義也」に相当し、「当」が疑問詞を伴う時は、

著者はすべて「はタ」と訓讀している。疑問詞を伴う「当」は、殆ど意味を持たない「語助」と判断したのであろう。

(3) 「当」と助字を合わせた訓讀

①「当復」を「はた」と訓讀する例

未知從今去 未だ知らず今よりのち

当復如此不 當復此くの如くなるや不やを(186)

②「当須」を「まさニベシ」と訓讀する例

衣食當須紀 衣食は當須に紀むべし

力耕不吾欺 力耕こそ吾れを欺かじ(208)

①「当復」を「はた」と訓讀するのは、『助字弁略』

の「当復竝語助」に符合し、②「当須」を「まさニベシ」と訓讀するのは、「応也」「合也」の「当」と、「応也」「宜也」意の「須」を重ね、合わせて一つにしたものである。

(4) 「当」を詩意から訓讀

①「うんことを」と訓讀する例

種桑長江辺 桑を種ゑたり長江の辺

三年望當採 三年にして採らんことを望てり(313)

②「うんとは」と訓讀する例

初与君別時 初め君と別れし時

不謂行当久 謂はざりき行いて久しからんとは(3)

04)

③「よかし」と訓読する例

但恨多謬誤 但だ恨むらくは謬誤多けん

君当恕醉人 君よ醉人を恕せよかし (288)

①の「採らんことを」、②の「久しからんとは」、③の「恕せよかし」を、鈴木虎雄『陶淵明詩解』の「三年^{まさ}当に採るべきを望む」(285)、「謂はず行當に久しかるべしと」(271)、「君^{まさ}に醉人を恕すべし」(260)と比べた時、詩意に即応したこれらの訓読には含みがあり、著者の訓読の妙がいかんなく發揮されている、と言えよう。

著者は『陶淵明詩訳注』の「はしがき」に「此の書は、陶淵明についての、隨筆ないしは備忘録ともいふべきものであつて、精密な学究的著述とは、おのづから別物である」と言いつつ、「下篇の訳詩は、その様式が、従来の訓読と、さしたる差も無くて、それを訳詩と呼ぶことすら、まことにをこがましい次第であるが、文学作品の翻訳は、できるだけ原作の表現形式を生かしたものでありたい、といふのが私の平素の念願であるので、今、敢へてかういう方式をとつたのである」と述べている。本稿に取り上げた語数は余りに少ないが、それでも「乃」「便」「且」「自」「以」「已」「復」「當」の一語一語の多様な訓読を見ると、「従來の訓読」には見られない、一つひとつ詩意に即応した著者独自の、見識を披露した

訓読がなされている。それは「文学作品の翻訳は、できるだけ原作の表現形式を生かしたものでありたい」という、著者の「平素の念願」の現れであり、その熱い思いはわれわれにしっかりと伝わってくる。

(平成十六年八月五日)